絶望と悪夢の町に現れた思念体達

たぬえもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
絶望と悪夢の町に現れた思念体達

【Ｎコード】
Ｎ９７６３Ｑ

【作者名】
たぬえもん

【あらすじ】
星へ還っていった思念体達は気がつくと見知らぬ町にいた。そこは生ける屍達が轟く絶望と死が支配する町ラクーンシティ。その町で思念体達は何を成すのか誰にも分からない。　　つい勢いで書いた小説です。そのため凄いグダグダです。駄作ですが読んで貰えたら幸いです。

第1話（前書き）

つい勢いで書いてしまった小説です。

キャラクターの口調や性格が違う恐れが大変高いです。

それが嫌な人は見ない方がいいと思います

それでも読んでいただけたら幸いです。

第1話

ラクーンシティそれは元々は小さな田舎町だったが、国際企業アンブレラが工場を郊外に建設したことで飛躍的に発展した企業城下町である。

本来なら観光地として賑わっているはずの町だが、町のいたる所からは激しい物音や悲鳴が聞こえてくる。
この事から何かが起こっている事が分かる。

そんな町に三人の銀髪の男が立っていた。
一人目は腰に日本刀を差した少年のような外見の男・カダージュ。
二人目は女性のように美しい外見で変わった形の銃を腰にぶら下げた男・ヤズー　。
三人目は一番年長で屈強な外見で腰にヤズーと同じ銃をぶら下げ、手にガントレットのような物を付けた男・ロッズ。

「此処はどこだぁ～？なぁカダージュ。此処がどこか分かるか？」
「さぁ？僕も分からないよ。見た感じミッドガルでもエッジでもなさそうだけど」

ロッズの質問にカダージュが答える。

「・・・僕たちは確かに星へ還ったはずだ。なのに気がついたらこ

んな所に立っていた。・・・僕も訳が分からないよ」

カダージュは自分達の身に何が起きたか理解できず混乱していた。

「とりあえず、此処がどこか調べた方がいいんじゃないのかな？」

今まで無言だったヤズーが意見を出す。

「そうだね。まずは此処がどこか調べよう」

カダージュが提案を出した時。
何かが近寄って来る気配がした。
三人がそちらの方に顔を向けると、２０人くらいの人間が近寄ってきた。
だがどう見ても生きている人間には見えなかった。

「誰だい？あんたたち？」

カダージュが聞いても誰も答えようとせず、　ただうめき声を出し手を突き出して近寄って来た。
そしてその内の一人の男が口を開けてカダージュに噛み付こうとした瞬間。
男の首がボトリと落ちた。

「行き成り噛み付こうとするなんて、何を考えているのかなぁ」

カダージュの手にはいつの間にか日本刀の刃が二本にならんだ刀「双刃」が握られていた。
仲間が殺されたというのに、集団は関係ないと言うように近づいて来る。

「あんたたちは敵。という事でいいのかな」

カダージュは双刀を片手でクルクル回し切っ先を集団に、いやゾンビ達に向ける。
それでも尚ゾンビ達は近寄って来る。

「敵。という事でいいだね」
「ふふ」
「敵かぁ。だったら、遊ぼうか」

カダージュが言うのと同時にヤズーが銃「ベルベット・ナイトメア」を腰から抜く。
ロッズも腕に着けられたパイルバンカー「デュアルハウンド」を構える。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――

絶望と悪夢の町ラクーンシティで思念体達の物語が動き出す

それがどの様な結果を招くか誰にも分からない。

第1話（後書き）

作者のたぬえもんです。

この小説はかなりの勢いで書いています。
あと作者の自己満足で書いています。
そのためグダグダな話になると思います。
それでも読んでいただけたら幸いです。

第2話（前書き）

遅れてすいません！！

もう一つ小説を優先して書いているため遅れました。

今回もグダグダで短いですが、見ていただけたら幸いです。

第2話

「は！」

カダージュがゾンビに向かって双刀を振るうと、ゾンビの体は何の抵抗も無く頭から真っ二つに切り裂かれる。
カダージュはすぐに違う標的に向かって双刀を振るっていく。

「ふふ」

ヤズーは薄く笑うと、次々とゾンビの頭をベルベット・ナイトメアで撃ち抜いて行く。

「おりゃ！」

ロッズはゾンビとの間合いを一瞬で詰めるとデュアルハウンドでゾンビを殴り潰していく。
たった数十秒で30体もいたゾンビは全滅してしまった。
それだけの相手を倒したというのに3人は息一つ切らせてないようだった。

「なんだぁ～全然弱いな～」

ロッズが期待はずれといった様に言う。
「確かに、動きは遅いし攻撃も単調おまけに攻撃を避けようとしないはっきり言ってただの的だね」
カダージュも相手の事をただの的と評価する。
「全然面白くないな」
ヤズーも先ほど戦いに不満があるようだ。
「とりあえず行こうか、道なりに進んでいけば何処かに着くかも知れないし？」
「そうだな」
「うん」
カタージュの言葉にロッズとヤズーが答え、３人は歩き出す。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

「道が三つに分かれてるね」

道を真っ直ぐに進み途中襲い掛かってきたゾンビ達を殺しながら進んでいた3人の目の前には三方向に分かれた道があった。

「モグモグ・・・どうするんだ？カダージュ」

ロッズは途中で手に入れたビーフジャーキーを食べながら尋ねる。

「そうだね、ここは別々の道を行かない？その方が色々分かりそうだし、2人とも携帯電話は持ってる？」
「おお、持ってるぜ」
「こっちもあるよ」
「もし何かあればこれで連絡を取ろう」
「わかった」
「ああ」

3人は別々の道に向かって歩き出した。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――――

それぞれ違う道を進む思念体達はその先で様々な出会いを経験する。

その出会いで彼等がなにを思うか誰にも分からない。

第2話（後書き）

短すぎる話ですいません！！

前書きでも書きましたが、作者はもう一つの小説を優先して書くためまた遅れると思います。

それでも見ていただけたら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9763q/

絶望と悪夢の町に現れた思念体達

2011年10月8日08時28分発行